

常磐松文庫蔵『藐姑射山・再詣姑射山』 一卷・
山岸文庫蔵『不留佐登』 一卷

長 島 弘 明

本学に所蔵する上田秋成の資料二点（及び山本吉左右氏蔵関連資料一点）を翻刻・紹介する。

一 『藐姑射山・再詣姑射山』

安永九年十月、大坂尼ヶ崎一丁目で医を業としていた秋成は、上洛して水無瀬川に遊び、また修学院離宮に参拝した。その折に成ったのが『水無瀬川』（『藤簍冊子』巻五所収）であり、この『藐姑射山』である。当時、秋成は四十七歳、現在残るこの種の和文の中では古い方に属する。

一方、『再詣姑射山』は、文化元年十月中旬、羽倉（荷田）信美らと再び修学院離宮に遊んだ折に成ったもの。文中に「……一度拝み奉し處なり。手をくれば、ことし文化のはしめと云年まで三十とせまりにや成ぬらん」とあるが、正確には二十四年後の再訪ということになる。同行者は、信美と、彼の次男で松室家へ入った重村以外は文中にその名が明示されていないが、後にある「探題後日出詠」の詠者、即ち、小川布淑・間齊（釈昇道）・松本柳斎・滝原豊常・羽倉（荷田）信愛・斎藤勝憑らの観荷堂社中（小沢芦庵門下）が、およそその折の顔ぶれと見て誤りなからう。また、末尾近くに出る「尼」とは、恵遊尼のことでもあらうか。さて、本学所蔵本の書誌は次の通りである。

本学常磐松文庫蔵。卷子本。一卷。縦二五・四糎、横四〇六・七糎（林鮎主書写『藐姑射山』九一・八糎、『再詣姑射山』の前

半秋成自筆部分一五九・九種、後半鮎主書写部分及び奥書一五五・〇種。亀甲に花織文深緑色表紙。題簽なし。見返しは、金砂子・金箔散らし。巻初に「実践女子大／学図書館印」の朱印。箱は、縦二八・七種、横五・九種、高さ五・五種。蓋の表に、「奉拝観脩学院行宮両度之記 餘齋阮秋成翁述」（筆者不明）と直接墨書。小口に「秋成／再詣／姑射山／巻物」とある紙片を貼付。

本巻子本の成立の経緯は、林鮎主の奥書から明らかである。即ち、佐野雪満がたまたま『再詣姑射山』の前半の秋成自筆稿を手し、鮎主のもとに持参したが、後半部は欠け、また『藐姑射山』の方も無いのを甚だ残念に思っていた所、幸いにも白井維徳が所持する別の秋成自筆本を見る機会を得、鮎主がその欠けた部分を補写したもの、という。従って、本巻子本の秋成自筆部分と、その他の鮎主補写部分は、厳密に言えば別系統の本文と言うべく、『再詣姑射山』の後の識語、「七十六翁餘齋成しるす」も、鮎主筆写部分（『藐姑射山』全文と『再詣姑射山』の後半）の底本となった白井維徳蔵本の成稿年時のみを示していることになる。秋成七十六歳は、文化六年。この年六月二十七日に秋成は没しているから、白井本の成稿は最晩年のこととなる。一方、秋成自筆部分の成稿はというに、書風から推して、これも文化五・六年頃であることは間違いない。

現在、『藐姑射山』は他に自筆本二種、『再詣姑射山』は自筆本一種・転写本一種が知られているが、混成の本文ながら、本巻子本は『藐姑射山』『再詣姑射山』の双方とも、現在の本文の中で恐らく最も遅く成立したものと推測される。

補写・奥書をなしている林鮎主は、通称・明田惣兵衛、字・波臣、号・栽松窩また宰相花、狂名を養老館路産ともいう狂歌師である。父は「早よみの路芳」と称された養老館路芳、弟は書肆の林安五郎。著書には『狂歌弁』（文政六年）などがあるが、国学も鈴屋門に学び、宣長の『授業門人姓名録』に（寛政五年条）、

京新町御池下ル丁 菱ヤ 林宗兵衛 鮎主

とある。藤井高尚の『備忘録』にも、

新町姉ヶ小路上ル丁 明田惣兵衛

林鮎主

とあり、家業は味噌商を営んでいた。天保二年没、六十八歳。秋成の『海道狂歌合』（文化九年刊か）の一本には、「文化壬申（九年）きさらき 菱の屋鮎主いふ」として、鮎主の序を付したものがあり、その中でも「吾師鶉居翁」と秋成のことを呼んでいる。狂歌か、和歌か、国学か、いずれにせよ鮎主は、数少ない秋成の門人の一人ということができる（もっとも、秋成自身は弟子をとること、そう称されることを嫌ったが）。なお、筆跡は勿論奥書に見える花押も、『狂歌弁』自序に見えるものと全く同一である。

補写部分の底本を提供した白井惟徳は、通称・元蔵、字・子恭、別号・赤水、また養素園と号す。姓は紀氏。京の書家、また医家で、『平安人物誌』文化十年版、文政五年版、文政十三年版、天保九年版の、書・詩・医家の部等に載る。秋成十三回忌に當つて建てられた西福寺の墓の碑陰に刻まれた、銘代りの村瀬栲亭の『後毎月集』序の書は、この白井惟徳の手になる。天保九年没、七十七歳。

『再詣姑射山』前半部の秋成自筆稿を最初に手に入れた佐野雪漪は未詳。鮎主の狂歌の方面での門人、ないし知友の一人であるうか。

翻刻は、なるべく底本に忠実であるように努めたが、句読点を私に補った。

（林鮎主の筆跡）

貌姑射山

安永九年かなな月、すかく院といふ山里に、靈元法皇の春秋に出ましておほん遊ひせさせたまひし水うまやのたゝせますを、みそかに詣たいまつりて、

おもほえずわけ入かたを事とへははこやの山のふもととなりけり

此御園は池の心目もはろ／＼とつくらせ給へるか、浴龍池とよはせたまふとそ。北の汀には、御舟よせさす設も見えたり。こゝにひら張ひきわたして、大み酒きこしめすとおもふもかしこきながら、そのかみしのはるゝ、いとかたしけなし。閑松嶋と申寫山そ、老たる玉松の千世は経なゝん波の上に偃臥たるか、わさとならすめてたし。

嶋山にたてる玉松の千世は経んかも大君のみゆきをまつと千世は経んかも

詩仙臺と申は、詩哥のおほんあそひをこゝにあらせし所也。此軒に御製の紅葉と申は、こと樹よりたかく、色もこそめにいとおかしとなかめられ侍る。つたへきく、享保十九年に山皆紅葉と申御題に、

数しらぬ千しほの梢かさねあけてもみする山をなへて染ける

から哥ももり聞たいまつりしかと、おほしとゝめて侍る。此木のめいほく、この度にはあらずやはへる。窮邃軒と申大庭に立て見

わたせは、南は淀、鳥羽、伏見山、かくれたる所なく、北は岩倉山につゝきたる峯々、たゞみなしていとよく見ゆる。麓の道は、大原女の口とり、真柴いたゞきつれつゝ都に出るさまを、上手の絵には写しやえむ。御垣守松宮何かしのかたり言に、こは春たつ朝霞をあはれとみるより、夏は山水のたきり落て、扇はなたぬ山人も、こゝにはおきわするゝはかりなり。秋はことに紅葉多く植わたしたれば、まさなのから錦をひきわたしつれば、冬しらぬ白樫の枝に雪のとをゝに降つみたるは、いとあかぬけしきしたり。されはよ、大き聖の御心のかしこくもしめおかせ給へるを、おのれ久く聞えをり侍ることのかたしけなきに、年月みくさはらひ、落葉かきゝよめつゝ、まめなる大宮つかへつかうまつるとなにかたりける。いと有かたきけふのあそひなりける。

(以下秋成の筆跡)

再詣姑射山

神無月十日あまり、あるしの信美、誰かれ山のもみち見ん、いさたまへと云。今日雲の立まひもあらねは、扶くる人ゝを憑みて立たつ。山さとなから篁深く、いみしうしかまへたる所に入て思ひめぐらせは、一度拝み奉し處なり。手をゝれば、ことし文化のはしめと云年まで三十とせまりにや成ぬらん。いとも忝く、ありしたゞすまひなから變りたる。みあらか取はらひし跡に、礎をちこちによるほひ、かたへにくほかに池めいたる所も、小草しけりからみて、見るめ悲しく成んたりけり。そや蔵ろく菴と申て、御くるまよせより巡りて、曹司おゆ殿立つゝき、崖をおつる瀧のひゞき高からねと、造らせたまへりと見侍りし。昔の司守の弾正と云し翁のかたりことに、此南に彎弓閣申てたか殿のたゞせしか、所々風にこほれしかは、やかて掃きよめさせとなん。在てそ見奉らまほしなと思しも、今もたゞ秋のいろはかりそみのかみには増りたらめ。

荒ると見し昔の秋のしのひねにけふあらんとは思おもはさりしを

此御門を出てひんかしに登れば、はこやの山のかきに至りぬ。恐るゝ入てみたてまつれば、かうならん故こそあらね、世うつり時のゆければ、たゞ打ひそまるゝ也。鄰雲亭とゝもに、しせんたいきらゝしく□あらね、こゝも石すゑのみなる中に、やま寺名付させしみあかしの獨とき磐なるも、おのかものからさふゝしけ也。御せいのもみちも、あさましく朽折しかたへに、條葉さしかはしつゝ、こく薄く今をさかりと染なしたる、昔もかゝりやあらすや。はた御には幸はひ奉らざりけん。おくれて生れたる今日の人々の、翁かむかしかたりを打しんした覧にと思ふ計なり。よくりやう池めぐり乍みれば、あら山中に海をなす鴨おほし出る。それかくひろらなりし。今は瀧おちたるも、水涸つきたるに、葦の枯すさひしに、真すけの聲さむらにさやめける、冬の哀はすゝろに悲し。

年深きいけのやふ艸ふゆ枯て蘆の穂なみに風わたる

窮遂一軒一たひはこほれしかと、此四とせ計さいつ年にあらた也とて、今のみかき守か申す。おそるゝゝゝすのこに手掛てかしらさし入てみ奉れは、造らせしそ辱けれ。閑松島のだゝすまひ、松こそ年ふりてまさり顔に枝さしたれ、碧の色ふかく千年ならんには、幾そ度のみゆきにも遇たてまつらまし。こゝにつとひて遠くも近くも見渡さるゝとて、人人あはわかる。翁か秋きりにこめられし目には、心あてに打のそむかひこそ無けれ、秋のいろはこゝこそと殊に思ゆ。枝てりかけたるを見あくれば、

山祇の插頭の君につかへけんもみちの秋は今もみる哉

かやぬ姫の命は、いかてつれなかりけん。藪のした艸、崖のかけに、なへていろなくさふゝし。

もみちはの落るそむかし青やまを泣からしたる神代し思ほゆ

老くつるゝはかたちのみかは。物かたり、くり言のみ云たるよ。煙たえにし塩かまのとすんしくる。又この山さとに寶幢寺と云山寺は、一たひ御幸あらせし所とて（以下再び鮎主の筆）

けふのあるし方のしりにたちてゆくゝ松室重村道分てゆく。

草のみな花のひもとく秋すきてとけ霜寒し山の外陰は

寺の門入より、蘚深く林生めくり、篁繁あへる中に、紅葉は空を覆ひてかゝやかしく、瀧の音岩にふれゝて、さやゝゝとなるもしつか也。流あさくさいさこ明らかに、ふと心を是に洗はれてすゝしき。離てつくらせし庵に人々まとあして、酒や何やよき物もたせし取なみて、腹みつるまゝに哥よまんと云てよます。

いくしほの色にやあらん紅葉ゝをそむる時雨もよそにめぐりて

かた山あらしのとかにてとよまれしには、いくらの階をやくたるらん。日やうやうかたふきぬ。目のくらきに同し如にやあらんとて、我尼よひつれて立くる。暮のこるそらに十日あまりの月のおほろけなるものか、つまつくゝ家路をはるかに。

探題後日出詠

蔵六菴

布淑

かゝまれる亀のすかたをおもほして宮つくらせし万代のあと

彎弓閣

間齊

夕かけて御戸やわすれつたかとのにきよくさし入弓張の月

隣雲亭

ちかくたつ雲しもしらはことゝはんかゝる御そのとならぬむかしを

詩仙臺

はこやなるすめらみことのかしこにもめてゝうてなの名とやなしけん

浴龍池

かせふけは葦の穂波もたつの池のふるきあとこそなほ残たれ

閑松嶋

池なみはおともかはらす水たえてしまわに落る松のかけかな

窮遼軒

山かけの出ましの軒の見わたしはいくさとそともきはめさりける

柳斎

豊常

信愛

勝憑

七十六翁

餘齋成

しるす

こは、前師鶉居翁か、かたしけなき御園をよし有て、二たひまでおろかみたいまつりて書おかれし言の葉なるを、是度佐野雪満か得たりとてもて来るをみれば、翁の筆のあととはまかふ處もなけれど、初の度の記はなく、後の度のは末の一ひら欠たり。そもこの行宮は

元和の帝のはしめて営おかせ給へるを、

寛文法皇もつきて年の毎に三たひ四度御幸

あらせ給ひし處なるか、亭保いつのとしの後、君まさねはやゝ荒すさひたるを、おのれ鮎主も、ひと日所縁ある人にともなはれて拝みたいまつりし。さるをいにし文政壬午の比より、かの荒たるみあらかことゝく古しへの如、造らせたまひて、近きほとにまた萬代かけて御幸あらせ給へるよしをもちきゝて、下か下なる御民らまでも、いともかしこけれど、めてたう有かたき御代をあふきてよろこへる折なれば、雪満か此關たるをいたううらみ居るに、いとよき幸こそ有けれ、白井維徳大人

か、こもまた翁みつから書しゝ全きひと巻を得しとて見せらるれば、やかてそをもてかの欠たるを足らはしやるになん。

音絶てひさしき瀧を落す世にこをも補ふ水くきのあと

文政六とせ卯月九日

漢の屋
鮒主（花押）

二 『不留佐登』（付『應雲林院醫伯之需擬李太白春夜宴桃李園序』）

『不留佐登』（ふるさと）執筆の事情及び時期については、その前書と識語から明らかである。前文によれば、ある夜、力斎と秋成が語って、蘇子瞻（軾）の『唐に文章無し。……』（『東坡志林』巻七による）の評に話が及び、その韓昌黎（退之）の『送李愿歸盤谷序』を、以前、李太白の『春夜宴桃李園序』を国ぶりに書き改めたように直して欲しい、という力斎の求めに応じて、秋成が書いたものであるという。識語によれば、享和三年正月（秋成七十歳）の成稿ということになる。この『不留佐登』は、『藤簑冊子』巻五に、『故郷 傲韓退之送李愿歸盤谷序』の題で、文章に僅かな異同があつて収まるが、以前に『春夜宴桃李園序』を和文に書き直したものは、同じく『藤簑冊子』巻五で、『故郷』の直前にある『應雲林院醫伯之需擬李太白春夜宴桃李園序』の一文を指す。韓昌黎のものも李太白のものも、ともに『古文真宝後集』巻之三「序類」に所収。秋成は唐代の序の佳篇を二度にわたって和文化していることになる。

この『不留佐登』を求めた力斎は、從來不明とされてきたが、先の前書を読む限り、『春夜宴……』の和文化を逡巡した「雲林院醫伯」と同一人物でなくてはならない。『浪華郷友録』寛政二年版の「医家」の部にその名が見える。雲林院克誠、字・子享、号・力斎、雲林院玄仲で通る。『兼葭堂日記』にも名が載る大坂瓦町筋百貫町の医師である（『藤簑冊子』巻六「こを梅」末尾にも力斎の文が収まる）。この雲林院玄仲が、最初に秋成に『春夜宴……』を国ぶりに改めることを依頼したのはいつか。幸い『應雲林院醫伯之需……』の卷子本を二本見ることができた。一は山本吉左右氏御所蔵の秋成自筆本であり、いま一つはその精密な臨模本（某家蔵）である。山本氏は自筆本を御論考「秋成と陶工」〔文学〕昭50・11で紹介されているが、その折題名の「應雲林院醫伯之需……」の「醫」に後人の手が入って「陶」に改められていたために、陶工の雲林院文造に比定されたが、後に改竄に気付かれ、今回披見を許可頂いた際に、その旨の御教示を受けた。臨模本には明らかに「醫」とあり、やはり雲林院玄仲とすべきであろう。

さて、その自筆本の巻末に、「寛政庚申（十二年）春三月書之茲歲／享和壬亥（三年）正月以試毫之次／再寫七十翁無腸隱者（花押）」とある。即ち、『應雲林院醫伯之需…』の一文は、『不留佐登』成稿の享和三年より三年前の寛政十二年に初めて書かれ、力斎こと雲林院玄仲に贈られたものであり、山本本は、『不留佐登』が成った折に、同時に以前の稿を再写したものであることが判明する。

『藤箋冊子』所収の本文と比較するに、『不留佐登』『應雲林院醫伯之需…』ともに、少異がある。『藤箋冊子』に載せる方を一層推敲を経た形とすべきか。なお、両自筆本には、それぞれ後に漢文の原文を載せるが、『藤箋冊子』では、それが省かれている。

秋成の和文への移しかえ方を見るに、思い切って自由に筆を揮っており、翻案（あるいは創作）とでも称すべき文章になっている。これと似た試みに、「伴蒿蹊の家に人々あつまりて、題を分て文かける。其題、蒙求と云文の中に探れる」という前書を持った『郝廉留錢』の一文（『藤箋冊子』巻五）がある。『蒙求』の中から探題で選びとった題で、それぞれが文章を創作する、いわば和文の会であるが、岩橋小弥太氏によれば、これも享和三年の成稿という（『上田秋成全集』『上田秋成略年譜』）。秋成ひとりではなく、この頃彼の周辺の文人グループ全体にわたり、こうした試みが盛んだったということであろう。

さて、山岸文庫本『不留佐登』の書誌を次に記し、全文を翻刻する。また参考のため、後に山本本『應雲林院醫伯之需擬李太白春夜宴桃李園序』を併せ掲げる。なお、山岸文庫本『不留佐登』は、古典文庫『書初機嫌海 附、くせ物かたり』に既に翻刻が備わり、それを参照したが、誤植・誤読を改めて訂した。ともあれ、かつて中国種の典拠を見事な和漢混淆文（あるいは和文）に翻案して見せた『雨月物語』の作者の、文章家としての力量をうかがうに足る二篇である。

本学山岸文庫蔵。秋成自筆。卷子本。一卷。縦二七・一糎、横六三・三糎。亀甲に雲龍織文藍色表紙。題簽なし。見返し、銀砂子散らし。巻初に「山岸文庫」の朱印。箱は、縦三一・六糎、横六・三糎、高さ七・四糎。蓋の表右下に「山岸文庫」の墨印。

不留佐登

一夜力斎主翁かたりて云、藕子瞻云、唐に文章無し。唯韓昌黎の李愿が郷里に帰るを送る序のみ。常に是にあらはまく思ひては、筆を止る事幾度。あゝ彼をゆるして獨たらしめんと。此語を見て、此序を慙んずる事年久し。前には太白の春夜宴を國ふ

りにかいあらためて贈られしを、世に珍らかに思ひて蔵めたる、又是をも其ためしならはやと。試むるにあらされは、是を否むは種子に擬するに似たり。よしや是か注書人に倣ふべく、若讀たかへ、こゝろをあやまるとも、道々しからぬ戯わさは、人とかむましきそとて筆は執ぬ。いと鼻しろむへき事や。

むかしの人も、世にあへるあり、時失へるあり。其あといとも多かめるを、更にかそへあけんか煩はしき。世にあへるか賢きにも非ず。時うしなへるか愚なるにもあらず。身のさいはひのおくれさいたち、あひあはぬにこそあらめ。世にあひてはまれとる人の、後におとしめられやせんと思ひはかりはあらし。樂しとするもうしと云も、求むるまゝにはあらて、誰かあたふるたま物そや。昔は聖の御代に生れあひて賢しといふ人の、ひとり高きみくらに登り、一人は山にはひ隠れしをおもへ。身のほとんたかひあるをいかにせん。世にあへは馬車を道にとゝろかし、みかたとに参りてはつかさ／＼の上にをり、思ふを奉り、言を納れまゐらずに、君を始、このしらせます國のかきりは、其事行なはるゝは、いとも有かたきさいはひ人なりけり。さるはもとめねと、四方の國つ寶を庫につみ、山や江や、獲物を朝ゆふの箸に下し、心のゆくまゝなるを、かしこき人は足るとのみにあはて、あな恐ろしとさへ遠く思議りては、忌避る人もありしとや。是を露ばかりもおほししらて、あたゝかに打かさね、腹ふくるゝまで喰はんか、むくひあしからず終るもあり。或は中空にしてやめられ、あるは後いかならんとつかへをやむる。罷るをかしこしとせは、出るをおろか也とせん歟。出て遇さるは退き、洩らるゝは進む。是そ世にたつ人の心にして、おのかほと／＼をたもつなり。あなかちに隠れしそきたらんもたかひたらめ。すゝむへきにしそきなんは、身をあやまれるにて、後とりかへさまほしき世も出こんものぞ。又退くへき時を失なひて、罪かうむるを、後いかにせん。垣ねの菊を折ては、南の山を朝夕に打望みたりし人は、この巖の中にかへりし人のたくひの身のほとをたもちて、安きを楽しむ也。やめられて悲しとおほさぬ人、殊にたふとし。我と避て飢につき、水に入し人を、おろか也ともいはぬは、さるへきことわりの、いとせめたるにこそおはすらめ。罪無くて海山おもしろき所の月を見てましと獨こちし人は、おほやけにまめ／＼しからぬにはあらて、みそかに打なけかるゝよしも有つらめ。彼谷ふかき所の民は、心こそ木すくなれ。つらつきおに／＼しく、鳥の囀りに物いひつゝけなむは、何かたらふへくもあらぬ。そも故さとなればこそあれ、こゝに還るは、心を安きにおかむのねかひ也。しらぬ國とほき境にゆかは、山は高くそは／＼しく、ありその波おとろ／＼しくて、すむ人もかたち心の鬼々しきは、いきて誰とか交らむ。都わたりこそ、山のたゝすまひ、水の流、木艸の花も、おのつからにこやかに、あな面白と打なかめらるゝ。こゝを捨ていつこにかは。されとありたき處をさへうしとおほゆるは、たゝ安き

一かたのねかひにたかふからなり。世を見れば、若き男ともの、酒賣る家にうかれ遊ぶにさへ、十に二たひなどや心になふらめ。大かたはあるしか立まふを空ほめし、哥姫等かこゝろを取つゝとむるには、思ふにかなふ夜こそとほしけれ。怒を堪へ、足さるを忍ぶよ、いともくるしけ也とは、老て後にこそ思ひしらる。物博く識り、人にこえたりと見ゆるも、若きほとのはやり心の煩ひ也。物学ふは、人におもねるにひとしと云教へも有とや。あ中とても、鄙の宮こと云あたりの人は、此わつらひを求むるまけし心の多かりき。都にあれと、老か如きあやしけにおひ立し者は、こゝの古堤の陰に押ふせたる庵すみして、かた居ものゝさまによるほひありくにも、昔かたはしはかり学ひし事さへ、名残なく忘れにて、まなこ病つかれしには、花の匂ひ、月の光も見とゝめぬは、ありて何のかひやはある。中ゝにむかしの田舎住こそしのはしけれ。さきのほまれ、後の訕りもあなわつらはし。我其うしろに立て聞をはこそ、たゞ生れたるほとゝに、寒からずほしからずは、ひとの國、ふる郷のけちめもあらし。かの谷ふかき處のありさま、いきて見るとも、すまてあはれをしらむやは。住て都のわひしきは、身のほととの貧しき也。退之の文の世に獨たちしは、天のたま物か、つとめて到れる歟。是をゆるしてしりにたつ人は、おのかほとをしりたるなり。出てはつかへ、あはさるは退そく。其ほとゝにやすんずる人の、たのしみふかきをさへ思ひしらる。それにつきてうたへる哥、

山高み めくれる谷の 水清み 木草の花も 春秋の 色香あらそひ 鳥の聲 ほからゝと 明くれの しつげき空に ゆく雲は 心無しとふ 心しも ありやあらぬや 山ふかき 谷かくれして すむ民の しの屋ふきあへ 松の戸の 待事もなく 夏冬の うさをもいはて 晝はも 田かり斧うち 夜るはもよ 真柴折焼 かつら絢ひ おのかほとなる なりはひをうしともあらず たぬしとも しらて在ふる ふる郷を 何心して あま雲の よそに見すてて この谷の ふかきゆ出て 中空に 聳え立たる 喬き木に 遷りて見れば 葉をしけみ 枝さしかはし 香にゝほふ 花を粧ひ 真珠なす 実をはさゝけて 大君に つかへまつれば 禿の下 おほふはかりの 袖ふりはへ ふつまに鞍おき あちまきの 車とゝろに 飛弾人の 縄ひきはへし 大路さへ 所せきまで 雲の旗 風に靡かせ 前しりへ 八十伴の男等 弓箭おひ 鉾つきたてゝ あゆまする つかさにしあれば 皆人は 野邊の鳥むし 七くさの 寶はさゝれ 家にあれば 錦をまとふ 腰はその すかる乙女等 右に笑み 左に媚て うま酒の 泉を湛へ 山に入 江に釣獲たる くさゝを かし葉手めして かしは葉を 敷取なへて あかなくも きこしゝ家は 一つの間に 和泉の柚か うつ斧に 枝葉はしほみ 根ををつらね 薪となしぬ そをみれば 喬きはいつら 青雲に そひえし峯は 世の塵の つみて成にし 山なれば 崩倒れて 赤駒の あかきに碎き 玉はこの 道ゆき人の わら沓に くゑはらゝかし はてゝは 夢かたりして ほまれとて 人の羨む 紫の 名高の浦に よ

する浪 磯にみたれて 後の世に そゝりくたしぬ あしたには たぬしと見しも かけろふの ゆふへになれば ことし
も かきけたれつる ともし火の 光も闇に あまの戸の 岩屋戸たてゝ こもらしゝ 神代のかたり おもほえて 今のう
つゝに 思ひ得は おのかほとく 一日には 三度ならすも かへり見て それにつけつゝ ありなめと おもふはたゝに
うら安の やすきを頼む 心ひとつそ

李君は

出て遊ふたまは夢路かうつゝかもさむれは帰るふるさとの宿

我は

故さとにあらぬ都にありわひてかへる日しらぬなけきをそする

送李愿帰盤谷序

大行之陽有盤谷。々々之閒、泉甘而土肥、草木叢茂、居民鮮少。或曰、謂其環兩山之閒、故曰盤谷。或曰、是谷也、宅幽而勢阻。隱者之盤旋。受人李愿居之。愿之言曰、人之称大丈夫者、我知之矣。利澤施于人、名聲昭於時。生於廟朝、進退百官、而佐天子出令。其在外、則樹旗旄、羅弓矢、武夫前呵、從者塞途、供給之人、各執其物、夾道而疾馳。喜有賞、怒有刑。才峻滿前、道古今而譽盛德、入耳而不煩。曲眉豐頰、清聲而便体、秀外而惠中、飄輕裾、翳長袖、粉白黛綠者、列屋而閑居、妬寵而負恃、爭妍而取憐。大丈夫之遇知於天子、用力於當世者之所為也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不幸而致也。窮屈而野處、升高而望遠。坐茂樹以終日、濯清泉以自潔。採於山美可茹、釣于水鮮可食。起居無時、惟適之安。与其譽于前、執若無毀于其後。不維与其樂於身、執若無憂於其心。車馬不維、刀鋸不加、理乱不知、黜陟不聞。大丈夫不遇於時之所為也。我則行之。伺候於公卿之門、奔走於形勢之途、足將進而趨退、口將言而呬嚙。處汚穢而不羞、觸刑辟而誅戮、僥倖於萬一者、老而後止者、其於為人、賢不肖何如也。昌黎韓愈聞其言壯之、与之酒、而為之歌曰、

盤之中、維子之宮。盤上、維子之稼。盤之泉、可濯可湘。盤之阻、誰爭子所。窈而深、廓其有容。繚而曲、如往水復。噲盤之樂兮、樂且無央。犀豹遠跡兮、蛟龍遁藏。鬼神守護兮、呵禁不祥。飲且食兮、壽而康。無不足兮、無所望。膏吾車兮、秣吾馬。從子於盤兮、終吾生以徜徉。

李愿唐功臣、西平忠武王晟之子。

盤石地名、在益州齊源縣。

享和三年正月穀旦試毫

七十翁餘齋

卅〔阮〕〔煥成〕

(参考、山本吉左右氏蔵)

應雲林院醫伯之需擬李太白春夜宴桃李園序

やよひの望の夜ころ、霞みなからに、夕かけて月いと花やかにさし昇りて、庭の櫻か枝に先かゝれる影の、花に色をあらそふは、似るものなくあはれ也。人々この木のもとにおりあて、酒くみ遊ぶ。主の翁いへる、月日は箭を射るにたとへ、人の命は逝水のあとなきに云も、こよひや引て放たぬほと、瀬によとむひまといはゝいかに。さはいたつらになかめむは、花の思はむをやさしみたまへとて、土器をすゝめ、筆研さゝけ出て、物もとめ顔なり。まろうさね云、行水と過る齡とちる花をまてと云に、とゝまらすとや。我如きは世に逗まりて何事をかなすへき。年もゆけかし、水もとまされ。たゝこよひの花はかりは、翌は雪ともと打守らへる。わかしさかしたちたる人の云、酌てあかぬは、大伴のそち君こゝにおはすに似て、言に飛てうたはゝ、つらゆき・躬恒も昔の人ならず。酒は量り浅くとも、ことのしらへ拙くしもいへ、このめつる心はおとらし物を。我先いはむとて、打うめぎ、はやりかにて、

大はらや臚のしみつ春の夜の月をさくらに掛けて移れる

酔泣せぬ人の云、山のたゝすまひ、水のなかれ、時々の草木のいろ香、鳥の聲、虫のね、いにしへ今たかはしを、是めつる心詞の古きにおとるこそ、いとも爪くはるゝわさなれば、吾は中々なる事いはしとて、袖たれ打もたしを。一人は觸を剥ながら、

さくら花影のやとれは久方のかつらの枝もともにかさゝむ

翁さひたる人、

よしさらは齡は花にゆつらなむかたふく月我をいさなへ

さすがに打泣たるはうたてし。まらうとさねか、

さく花のしづくにぬるゝ我袖を月にほすとして夜は更につゝ

あるしいたう酔すゝみして、人ゝの詞の花は、木末も色なくそ見ゆ。風さそはねは散もはしめす、月も暁かけて春の夜みしかくもあらし。酒の泉猶つきぬそとて、ほときはうしとりて、聲いと高らか也

この酒をかみてたゝへし壺の中に長き月日はありとこそきけ

物らいはぬ人ゝは、おのかしゝ酌つゝ、御罰いたうかうむりぬといひてなむ。

太白春夜宴序

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。而浮世如夢。為歡幾。古人秉燭在遊、良有以也。況陽春召我以煙景、大塊假我以文章。群季俊秀、皆為惠連。吾人咏歌。獨慚康樂。幽賞未已、高談轉清。開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月。不有佳作、何伸雅懷。罰依金谷酒數。

寛政庚申春三月書之茲歲

享和壬亥正月以試毫之次

再寫焉七十翁無腸隱者

(花押)

〔付記〕 貴重な御所蔵の資料の翻刻・紹介を御許可頂いた山本吉左右氏に、心より御礼申し上げます。